防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業の取組について

―　緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練　―

８　白馬村立白馬中学校

１　はじめに

白馬村は長野県の北部に位置する人口約9.200名の村である。本校は、生徒数 217 名、職員数 28 名の山間中規模校であり、保護者の多くは本村の基幹産業であるスキー場や　宿泊施設で働いている。また、本村は、神城断層の上に立地しており、平成 26 年 11 月 22 日には、県北部を震源にした最大震度６弱を観測した地震（神城断層地震）の被害を受けている。地域の助け合いが功を奏して、被害にあって亡くなる方はいなかったが、豪雪地帯であるために家屋が比較的頑丈な造りであったにもかかわらず、特に堀ノ内・三日市場地区の被害は甚大で、全壊または半壊した家屋が多く見られた。本校にも、避難所生活を長い間しいられる生徒がおり、当時のことを思い出しては気持ちが沈み、スクールカウンセラーの面接を継続して受けるケースも多くあった。

２　本校の防災体制について

本校は、年間３回の避難訓練を実施している。また、災害時には学校安全管理マニュアルに従って、教職員が防災組織を使った対応をしている。さらに、安全の日を月１回設けて、校内の各自の管理場所を点検している。

３　緊急地震速報受信システム設置前の避難訓練について

(1) 年間の避難訓練計画

①　第１回避難訓練　　４月２０日

【目的】新年度の始まりにあたり、教室からの避難の仕方、避難経路及び職員活動の確認をする。

②　第２回避難訓練　　９月　４日

【目的】大地震発生に伴う生徒及び職員の安全を確保する。

③　第３回避難訓練　１１月２２日（神城断層地震発生日）

【目的】緊急地震速報を利用し、学校管理下における生徒の安全確保と避難行動を安全に、迅速に、確実に行う。

(2) 避難訓練の工夫

①校舎内の設定

本校では、実際に災害が発生した場合に校舎内の景色がどのように変化するのかを生徒に実感させるための訓練を実施している。

ア　防火扉、防火シャッターを作動させる。

イ　スモークを発生させる。

②避難経路の設定

本村は、冬になると屋根から大量の雪が落ち、通常で定められている避難経路を使えなくなる。そこで、第３回目の避難訓練は校舎裏の出口が雪で塞がっているという設定で、訓練を実施している。①アのような状況の中では、出火場所を避けて避難する場合に、場所によっては、一度階段を使って、階上に上がってから避難するという場面もあり、通常経路を臨機応変に変更しなければ安全に外部に出ることができない。職員や生徒にとって、最も安全な経路を考えなければならないことを実感する訓練となっている。

③訓練後の振り返りと全体での共有

第２回目の避難訓練では、休み時間での訓練を実施している。生徒たちは、それぞれの場所で、避難指示を聞くのであるが、避難経路の選択を誤る例が数多くある。そこで、訓練終了後の振り返りでは、生徒に振り返り用紙に「ここにいて、このように避難した」「こんなことに困った」という内容の記述をさせたあと、発表させることで、学級全体が、その場面を共有できるようにしている。

４　緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練

(1) 緊急地震速報受信機設置に関わる取組

①　教職員に対する説明、研修

機器設置場所を職員室内の複合防災盤の壁に依頼して、設置の際には、教頭・防災教育主任・事務職員が説明を聞いた。教職員には、音声の確認をしてもらい、職員会議で機器の説明、避難訓練での使用、異常を知らせるのは震度４以上の地震が予想される場面であることを連絡した。

②　生徒に対する指導

本校に機器が設置され、避難訓練で使用することを予め連絡した。また、事後に従来は教頭からの訓練放送が終わった時点で、避難行動を開始することとなっていたが、今回の訓練後に、緊急地震速報の音声が流れた時点で、避難行動を開始することを全体で確認できた。

(2) 緊急地震速報システムを利用した避難訓練

11 月 22 日（第３回）の避難訓練は当日の午前中に雨が降り、水たまりがあったこともあり、屋内のランチルームへの避難に急遽変更した。これは、北朝鮮のミサイル発射の際の生徒たちを校内の一ヶ所に集める安全確保の訓練にもなった。先にも述べたように、神城断層地震を経験した生徒たちの中には、アラーム音を聞くことが精神的に

辛いと訴える生徒もおり、この地での訓練の難しさを感じた。

５　学校防災アドバイザーの関わり

本校は、信州大学の廣内教授にご指導をいただいている。事前に五ヵ年計画を策定する場面では、本村の実情に合わせた計画作りのご指導をいただくなど、避難訓練を実施するうえで、必要なことを事前指導していただいた。

また、第３回目の避難訓練の際には、全校生徒に白馬村の地形、そこからくる危険性、さらには、どのように避難行動をとればよいのかについてのご指導をいただいた。

６　事後の成果及び今後の課題

本校では、年間に３回の避難訓練を実施しているが、災害の想定は無限にあることから、少しでも生徒の経験値を上げることが必要であると、廣内教授からご指導いただいた。その１つとして、学校生活の様々な場面で短時間の「ショート訓練」を紹介していただいた。「災害発生－想定を放送で伝達－避難行動」の訓練を 10 分程度で終わらせ、放課後の学活で、簡単な振り返りを行うというものである。教職員や生徒にとって、負担にならない工夫をしながら、生徒の自助の力を育てていきたいと思う。

７　まとめ

本事業で緊急地震速報受信機が設置され、信州大学の廣内教授のご指導を受けて１年目が終わろうとしている。本年度は、全校生徒が、廣内教授のお話から、白馬には大きな断層があることを知り、いつ、いかなる災害が起きるのか予測できないことがわかったことが、自助の１つにつながったのではないかと思われる。

来年度以降は、生徒の災害に対する経験値を上げるための様々な取り組みについて考えていきたい。

（　文責　教頭　早川正美　）

本校における防災管理，防災教育の充実に向けた取組について
―　学校防災アドバイザー派遣・活用事業　―

９　長野市立山王小学校

１　はじめに

本校は、長野市の中心市街地に位置し、東は交通の要所である長野駅善光寺口周辺から、西は自然豊かな旭山までを学区とする変化に富んだ学区である。ビルに囲まれた学校であるが、すぐ西側を裾花川が流れ、校内には校章のデザインになっている白モクレンをはじめ、二百種以上の樹木や草花が生える自然豊かな学校である。大正 12 年に長野尋常小学校山王部校として設立し、大正 15 年に山王尋常小学校となり、昭和 22 年より長野市立山王小学校となっている。かつては全校児童数が 1,900 名余の頃もあったが、現在は全校児童 258 名（各学年２学級）である。

今年度より緊急地震速報受信システム設置対象校及び学校防災アドバイザー派遣対象校の指定を受け、本校の防災管理・防災教育について、学校防災アドバイザーの指導を受けながら改善の方向を探っている。緊急地震速報受信システムについては、インターネット接続工事が残っており、接続ができ次第、緊急地震速報受信システムを使った避難訓練をおこないたいと考えている。

２　本校の防災体制について（概要）

年度当初に次頁のように防災の組織を作り、年３回の避難訓練をおこなっている。

非常時の組織としては整えられており、避難訓練も定期的におこなわれ、児童も職員の指示に従って整然と避難できている姿が見られる。しかし、災害が起きたときに本校の周りで何が起こる可能性があるのかという想定がなされておらず、校庭に避難をして全校児童が確認されれば終了という避難訓練になっている実情もある。災害時に起こり得る様々なことを想定しながら、二次避難の仕方・保護者との連絡の仕方等を、具体的に職員がイメージして検討し、対応を考えておくことが必要であると考えている。

係	任　　務
第１報	● 火災発見の第１報を事務室へ連絡(①非常ベル、②伝令、③校内電話) ● 連絡後消火係が来るまで初期消火 ● 消火係到着後は自分の任務へ
係(場所)	任　　務
本部(校庭)	全体の統括、指示、指令、人員確認
通報・連絡係(事務室)	校内緊急放送を流す消防署等への通報初動指示
救護係(校庭)	病気・けがをした児童の避難誘導、手当
児童管理係(校庭)	避難した児童の人員確認、保護
搬出係(校長室)	重要物件の搬出管理
消火係(出火場所)	初期消火への対応、現場での指示
避難誘導係(各分担場所)	授業時の避難誘導〇担任(学年主任)
	授業時間外の避難誘導北校舎 1F, 2F, 3F南校舎 1F, 2F, 3F体育館　校庭

３　本年度の取り組みと、学校防災アドバイザーの関わり

(1)　ＮＴＴタウンページと連携した防災教育①「身近な場所にある災害の跡から、防災の必要性を考えよう」　７月５日(水)　６年生児童

災害が起きたときに、本校の周辺では何が起きてしまうのか、職員・児童が実際に災害の跡に触れることで起こりうる被害をイメージしやすくなるのではないかと考え、ＮＴＴ防災タウンページを作成された方の支援をいただきながら実施した。

1847 年５月８日に、善光寺平で起きたマグニチュード７．４ 程度と推定される大地震の断層の跡が学校近くに見られ、また善光寺に善光寺地震の碑があるので、実際にその場所に行き、学習をした。

児童からは「こんな大きな断層が起きたら、建物はみんな崩壊してしまう」「学校の近くでこんなに大きな地震の跡があるなんて知らなかった」等の声があった。もし地震が起きたときにどこにどのように避難したらいいか、防災タウンページの中の学校周辺地図を活用しながら考えることができた。

(2)　ＮＴＴタウンページと連携した防災教育②「親子で考える非常時の連絡方法」
　　９月９日（土）　６年生児童・保護者

７月におこなった授業を元に、災害が起きたときの対応の仕方について親子で学んだ。ＮＴＴ防災タウンページを作成されている方から、東日本大震災や熊本地震や九州での豪雨災害の際の被災者の方のお話しを元に、どのような備えが必要なのかお話しいただいた。

児童の大半は公衆電話使用の経験がなく、連絡を取り合う電話番号も知らないことが多い実態だった。そこで災害時の連絡のとり方を親子で確認したり、災害用伝言ダイヤルを実際に使ったりして、居場所や安否の連絡方法について学んだ。「今まで親子で災害が起きたときの事を考えたことがなかったので、いい機会だった」「いざというときのことを考えていきたい」等の感想があった。

(3)　学校防災アドバイザー　上野先生（長野地方気象台）の授業から
　　11 月 17 日（金）　５・６年

長野地方気象台次長　上野忠良先生にお越しいただき、大雨や雷・増水等の恐ろしさを、映像を交えながら教えていただいた。その上で、天気予報や緊急速報などの情報をみて適切に行動することや、天候の変化に気づくことの大切さを教えていただいた。

(4)　学校防災アドバイザーとの連携から

信州大学産学官・社会連携推進機構リサーチ・アドミニストレーションセンター助教 本間喜子先生には、8 月 30 日･11 月 14 日の避難訓練の際にご指導いただいた。

①<u>ご指導をいただいた点</u>

ア　地震を想定した訓練で、机の下にすぐに入る姿があってよかった。紅白帽子では薄いので、座布団なかったら運動服を入れる袋等で身体を守ることができると良い。

イ　避難の際に避難経路が重なって、上の学年の児童が下の学年の児童を待っている姿があった。特に踊り場の付近はガラスが割れて落ちてくる可能性がある。避難経路を更に見直していくと良い。

ウ　廊下に並べてある長机が動きやすく、置いてあるものが散乱する可能性がある。

エ　階段が使えなくなったときの対応、放送機器が使えなくなったときの対応を考えておく必要がある。様々な想定を避難訓練に組み込んでいく必要がある。

オ　１年生で窓ガラスの近くで座って待機している児童の姿があった。

以上の点については、すぐに取り組める点は職員会で提案しながら改善の方向を検討している。

また、本間先生を通して、学区の住民自治協議会防災担当の方と地域防災について話し合う機会を設けることができた。避難所の運営や地域の方の分担・学校の分担等をこれから話し合っていくことの確認ができ、本間先生にもご指導いただいて、来年度以降の道筋を立てることができた。

４　緊急地震速報受信システム設置前の避難訓練について

12 月 12 日(火)に事務室への設置工事が完了した。現在はＮＴＴ内の工事が必要なため、ネットワークがつながらない状況である。１月中旬にネットワークの工事があるため、現在のところ緊急地震速報受信システムの試験及び訓練ができていない。工事の完了を見て、短時間のシェークアウト訓練的な避難訓練をおこなう予定である。

５　事業の成果及び今後の課題

学校内で防災教育の大切さを確認し合い、また学校防災アドバイザーから専門の立場でご指導いただき、学校として「子どもの命を守る」ことの大切さを職員が共有し、そのためにできる事を新たな視点で考え始めることができたと思う。また今年度取り組んでいる防災の取り組みがマスコミで取り上げられ、保護者や地域の方の関心も高まってきている。「防災」をキーワードに地域の方と連携し、防災時の地域の拠点としての学校のあり方について検討をしていきたい。

６　まとめ

学校防災アドバイザーの先生方の具体的なご指導で、本校の目指す防災教育の方向が見えてきたと思う。初年度ということで、まだまだ課題が多く、充分な成果を得るところまで至っていないが、今年度の成果をいかしながら防災組織づくりや避難方法の改善を検討したり、職員・児童の意識を高めたり、地域との連携を深めたりしていきたいと考えている。

（　文責　教頭　宮澤俊充　）

本校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について

―　学校防災アドバイザー派遣・活用事業　―

10　長野市立中条小学校

１　はじめに　～土砂災害警戒区域に隣接する中条小学校～

Fig1 ↑
Fig2 ↓

本校は、平成 29 年度開校 40 周年を迎える学校で旧中条村の３校を統合した比較的新しい校舎である。

校舎棟は、緩い傾斜地に階段状に配置され、校庭より順に管理棟・教室棟・特別教室棟・体育館が配置されている。一番手前の管理棟１Ｆには、認定なかじょう保育園が設置されているところが珍しい。小学校の児童数は、100 名を切ってから５年目。29 年度は 55 名の小規模校である。(Fig1)

Fig２の校舎左側面の森は、通称ドングリ山とよばれ、敷地外ではあるが、校庭に隣接しているため子どもたちの遊び場となることもある。ドングリ山は、なかじょう保育園の園歌にも登場する身近な山ともなっている。ところが、このドングリ山は、ハザードマップによれば土砂災害警戒区域に特別がつく重度の危険をはらんだ土地で、県土尻川砂防事務所により、校舎との間に土砂崩落防止柵の設置工事が平成２７年より５年計画で始められた。地区内には、ドングリ山のように地盤の緩い箇所が何カ所か点在している。「君子危うきに近寄らず」で近寄らないという関わりを遠ざけるつきあい方もあろうが、危険個所は、生活では身近な場所と言え、暴れ方を知った上で、上手につきあうことが大事であると考える。

２　本校の防災体制について（概要）

学校周辺ではどのような目的でどのような工事が行われているのか？学校周辺の特にドングリ山は、どのような特徴があるのか･･･など、を理解することは、地域に点在する土砂災害特別警戒区域への対応に結びつき、「自分の命は自分で守る」ための大事なデータとなると思われる。*(右写真は崩落防止柵工事終了後、工事業者さんから説明を受ける高学年児童)*

実践に役立つには、内容を吟味していく必要は、感じるが具体的では無い状況である。

平成 29 年度の防災教育は、避難訓練３回・引き渡し訓練・Ｊアラート対応指導、訓練を行い、その中で、職員のリレーション訓練・避難誘導訓練、二次避難誘導訓練・防煙ドア体験・消火訓練などを取り入れてきた。また、従来の避難経路の見直しも行い、より安全な経路と避難時の約束を明らかにしてきた。

30 年１月には、緊急地震速報機が設置され、試験放送にて児童への紹介は済んでいるが、緊急地震速報機を使用しての避難訓練は来年度送りとなっている。

中条地区は、土砂災害警戒区域が数多く有り、学校での防災教育が地域でも「活きて働く力」となることが非常に大事ではあるが、地域に於いては（最低）保護者の理解協力も必要となる。引き渡し訓練等の折に、情報提供での啓発に努めているが充分とは言えない。

３　学校防災アドバイザーの関わり

(1)　防災アドバイザー（信州大学榊原教授）による指導概要

＜７月２５日＞
①学校環境実態把握
②避難訓練計画への指導
＜９月　４日＞
③避難訓練における児童への指導
④職員への指導
＜１月１０日＞
⑤地震速報機ネットワーク開通時の点検指導
⑥来年度防災教育計画に対する指導

③では、ドングリ山も含めた土砂災害警戒区域について、土はどのような状態なのか、どうして土が崩れてしまうのか、どのようなときに崩れやすいのかなど、簡易実験を通しながら、児童へわかりやすく説明していただけた。地滑り危険箇所は、学校の周りだけではなく、家の近所や通学路に即してもあるので、防災マップで確認しておこうとまとめていただくことで、次に繋がる指導となった。

④⑥における職員への指導は、（あってはいけないが）「実践に結びつく」のコンセプトを随所に感じる。例えば、避難訓練の想定も、本当に火災や地震が起きれば、このような点はどうか？と問われ、その対処法を回答した後の職員への指示や連携について考えさせられる。校内放送が使用できないときの指示連絡をどのように行うかとか、地震後の避難をどの程度の基準をどう定めるか、また、被災状況をどう集めるか、周りに雪があるときに起こった災害時の二次避難場所への誘導で、留意すべき事はどのようなものがあるか、冬場の条件が悪いときの避難訓練を行う前にどのようなデータを取っておけば良いかなど質問されながら一緒に考えてくださるスタンスでの指導いただきありがたかった。

４　事業の成果及び今後の課題

(1) 来年度の具体的な取組内容

①地震速報機を利用した避難訓練

②防災を取り入れた授業公開

③Ｊアラート対応訓練

④２次避難場所での引き渡し訓練

(2) 実際の災害時に必要となってくること

①各地区の危険個所の把握と通学路の安全点検

②保護者の避難場所把握（短期的長期的）

③降雪時の避難経路の確保など

※　学校防災アドバイザーに、来年度の防災教育計画について、ご指導いただいたことを踏まえ、上記の点を整理しながら防災管理・防災教育を推進していきたい。

５　まとめ

前年度を踏襲した防災訓練を繰り返していると実践とどんどん離れていくような気がする。同様な訓練でも想定を変化させることで、課題が変わり、訓練も課題追究型となる。まだ初年度であるので成果を挙げることはできないが、本校の防災教育がどのように形を変えていくか楽しみである。

（　文責　教頭　小伊藤　信　）

本校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について
― 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 ―

11 長野市立豊野中学校

１ はじめに

本校は、昭和 29 年に上郷村と鳥居村が合併して豊野町となり、昭和 32 年に旧豊野東中学校と旧豊野西中学校を統合し豊野中学校として開校した。平成 17 年に長野市と合併により長野市立豊野中学校となる。平成 23 年には校舎、体育館の全面改築により耐震化が行われた。28 年度に開校 60 周年を迎え、本年度は 12 学級生徒数 266 名の学校である。学校の伝統として「ノーチャイム・２分前着席」により生徒は時計を見て行動し、清掃は「無言・膝つき清掃」として定着しており、県外の中学校が毎年清掃視察に訪れている。

「ゆたかの」と呼ばれるこの地域を通過する国道 18 号線はアップルラインの通称をもつ。校章のデザインにリンゴの葉が用いられ、校歌では「りんご花咲く」「りんご色づき」と歌われ、りんごが地域の特産となっている。

２ 本校の防災体制について（概要）

豊野地区は戸隠山麗を源とする鳥居川が町の東西を二分して流れ、飯縄山山中から流れる浅川が南部を縦断して千曲川に合流していく地形であり、何度となく洪水による被害を受けてきている。平成７年７月の鳥居川の氾濫では水深が深いところで４ｍを越え、床上浸水 244 戸、ＪＲ信越線・飯山線が不通、国道 18 号線が寸断される大被害となり災害救助法が適用された（豊野町誌より）。学校周辺は長野市ハザードマップによると洪水時浸水の深さは５ｍ以上で、浸水の可能性がある避難所となっている。指定緊急避難場所として洪水等は外れている。

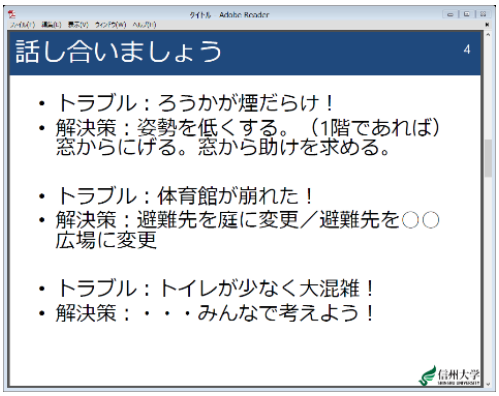
本校では防災計画、学校安全計画、危機管理マニュアルを危機管理指導部で毎年見直し改定を行っている。防災訓練は年３回実施し、１回目は消防署の方に災害時の通報や避難訓練の様子を見ていただき、指導を受けている。２回目は予告をせず、授業時間以外の訓練を実施し、生徒が放送を聞き自らの判断で避難をする訓練を実施している。３回目は地震を想定し身を守る訓練、揺れが収まった後の建物・施設の完全確認及び避難についての訓練を行っている。

３ 学校防災アドバイザーの関わり

学校防災アドバイザー信州大学学術研究院教育学系准教授島田英昭先生との打合せの中で、生徒に防災に関する講演について提案していただき、３回目の防災訓練と合わせて防災に関する講演会を依頼した。

当日は地震を想定した防災訓練を実施した後、全校生徒が体育館に集合して「防災対策でいちばん大切なこと」と題して防災に関する講演を聞いた。講演の中では災害時「避難するとき」「避難した後」に起こるトラブルを考え、そのトラブルに対する解決策を考えるグループワークを行った。

生徒は５，６人のグループになりワークシートに予想される



トラブルを書き出し、それに対する解決策を考えた。島田先生は「出た意見は否定しない」「正解、不正解と言うことはない」と説明したので生徒は火災や地震、風水害からＪアラートのミサイルまで多岐にわたって考えた。まず現実味を帯びた事象からトラブルを考えていたが、話し合いが進むにつれ「赤ちゃんが泣き叫んでいる→優先的に助ける」「ペットが取り残された→決死の覚悟で助け出す」「家族が亡くなってしまった→亡くなった家族の分まで強く生きる」など考えを広げていた。

グループワーク終了後のまとめでは、何が起きるか分からないのが災害である。しかし人間は想像して考えることができる生き物である。「災害が起きたらどうするか」を常に考え続けることが最大の防災対策であることを確認した。

４　事業の成果及び今後の課題

生徒は講演会の感想を生活記録に次のように書いている。

今日の講演を聞いて、いつも「ここで何かが起きたらどうするか」を考えてみようと思いました。何が起こるか分からないのですごく大事だと思いました。また、今日の講演会はいつもと少し変わっていて楽しかったです。
今回は地震が起きたときの訓練をしてから体育館で心理学専門の先生に来てもらい、トラブルの対処法についてグループで考えました。とてもおもしろい先生で楽しく話し合いができました。常に考えることが大切なんだなと思いました。１日１個は対処法を考えてみたいと思いました。
講演会で信大の先生から「人に流されず自分で考える」ということが災害の現場に遭遇したとき大切だと教えてもらいました。いつ災害が起きるか分からないので、今回教えてもらったことを万が一の時のために忘れずに覚えておきたいです。

教職員、生徒とも講演会では防災について基本的な行動の仕方などを聞くことを予想していたが、講演やグループワークを通していろいろな場面や事象を想定し考えることの大切さに意識を向けることができた。校内で行う避難訓練は毎年同じ想定で繰り返し行われている実態であるので、内容についても見直していく必要性を感じた。

５　まとめ

支援事業初年度で緊急地震速報器の導入及び緊急地震速報受信システムを利用した防災訓練の実施を予定したが､受信機の設置が 12 月末､ネットワークの接続が１月であるため、次年度に活用を考えていく。

学校防災アドバイザー派遣については防災について考える機会として有意義であった。次年度以降は実際の訓練についての指導や助言、防災マニュアルの見直し等にも協力をお願いしていく。

本校の体育館は緊急避難場所となっている関係で本年度は夏休み中にステージ天井材の張替やガラスの飛散防止施工を行った。地域の防災にかかわる施設として、学校だけでなく地域と連携して防災について考えていくことを今後の課題として捉えている。

（　文責　教頭　石神王貴　）

防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業の取組について

― 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 ―

12 長野市立西部中学校

１ はじめに

本校は、第１・３・４・５地区・小田切・芋井地区を中心に市内各地から 215 名の生徒が通ってきている。この中規模学校にあって学区は、長野駅前から飯綱の山間地までと広い学区であり、スクールバスを利用して登校する生徒もいる。また、長野市西部地区の避難場所として指定を受けており、大災害の発生時には地域住民が避難場所として利用するため、地域の方との連携が必要不可欠とされている。防災アドバイザー派遣・活用事業３年目となり、様々な方々とより実践的で理にかなった防災訓練の方向を模索していく必然性がある。

２ 本校の防災体制について

(1) 【緊急時集合場所】担当職員

本校舎１階(東側)(西側)：１学年担任 … 最終確認１学年副担任
本校舎２階(東側)(西側)：２学年担任 … 最終確認２学年副担任
本校舎３階(東側)(西側)：３学年担任 … 最終確認３学年副担任
南校舎１階，２階，体育館前：養護教諭・音楽科・体育科

(2) 学校防護団組織

◎防護団長 学校長 〇防災責任者 教頭

	係 職 員	任 務	係 生 徒
本部通報	〇教頭	・学校防災の全体的統率・指揮、消防署・教育委員会への連絡 ・消火施設等の点検・整備	
避難誘導	〇生徒指導主事	・安全な場所への生徒誘導、人数の確認・本部への連絡 ・避難場所での生徒の安全確保・避難経路の確認と障害物の除去	・正副学級長
警備	〇教諭	・残留生徒の有無・校舎内外の警備・搬出物の警備	
消火	〇教諭	・初期消火	
救護	〇養護教諭	・傷病人の救護	・保健委員（３年）

３　学校防災アドバイザーの関わり

＜昨年まで＞

本事業は本校において３年目になるが、昨年度までは防災アドバイザーの榊原先生にアドバイスを頂きながら年２回の避難訓練を中心に防災教育を行ってきた。特に地域との連携を意識し、近くにある加茂保育園の園児に参加してもらいその面倒を中学生が見たり、災害時には避難所となることを考えて、近所の住民一緒に訓練に参加してもらったりというより実践的な訓練を行った。

＜今年度＞

(1)　緊急地震速報受信機設置に関わる取組

今年度から本校には緊急地震速報受信システムが設置された。しかし、設置時期が大変遅くなり、システム稼働が１月 11 日になってしまったため、実践的な取組は、信州大学の榊原教授のアドバイスのもと来年度以降に行うことになった。

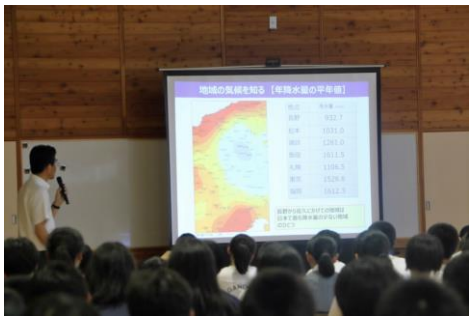
(2)　防災アドバイザーを活用した安全防災講話

ア　生徒に対する指導

本校では今年度新たに長野地方気象台の上野忠良氏をアドバイザーとしてお迎えし、全校生徒向けの防災安全講話を行った。昨今の自然災害による全国的な被害を踏まえ、長野市防災マップ（ハザードマップ）を活用して、特に本校学区内で注意しなければならない土砂災害についての知識や危険性を生徒に伝えることができた。また天候急変時に身を守るための心構え、いつ起こるか分からない地震に対しての日頃の備えの大切さなども講話の中で語って頂いた。

イ　教職員に対する防災教育

夏休みの職員研修として長野地方気象台から気象情報官をお呼びし、子どもたちの命を守るために知っておかなければならない様々な気象情報知識や、子どもの安全のために必要な情報の活用法などを全職員で学んだ。



４　事業の成果及び今後の課題

(1)　成果

ア　生徒が自分の身は自分で守るという基本を意識することができた。

イ　より実践的で、多くのトラブルを想定した防災訓練を、体験していくことが大切であると学んだ。

ウ　生徒が、家庭でも防災の話題について家で話しをするなど、日頃から防災について意識することの大切さを学んだ。

エ　教職員が、マニュアル通りの訓練では対応できないイレギュラーな事態に対応するために、常に「こうなったらどうする？」という様々な想定をし、その時にどう動くかを事前に決めておくことの大切さを学んだ。

(2)　今後の課題

ア　緊急地震速報受信システムを実際に活用した防災訓練を実施する。

イ　トラブルがあった場合を想定した防災訓練を実施する。

ウ　地域の方とだけでなく、小学校とも連携した防災訓練や引き渡し訓練を実施する。

５　まとめ（学校防災アドバイザーの先生方のお話から）

(1)　地域の方を巻き込んだ防災訓練を定期的に行うことが大切である。

(2)　防災学習を月に１回行っている学校もある。少なくとも学期に１回は防災学習を行ってほしい。また１年に１回、防災学習を参観日の授業で公開し、先生と保護者生徒が防災について考え、話し合うことが大切である。

(3)　生徒には、「自分の身は自分で守る」ことを念頭に、地域の方のために何ができるのか考えさせ、実際に行動できるようにしておくことが大切である。

(4)　災害時に、日常生活で経験したことを生かせるように、色々な場面を想定した訓練を行っていくことが大切である。

（　文責　教諭　山田崇史　）

本校における防災管理、避難訓練の充実に向けた取組について

―　学校防災アドバイザー派遣・活用事業　―

13　飯山市立木島小学校

１　はじめに

本校の立地する木島地区は、千曲川と樽川の間に位置している。昭和 57 年９月の台風による大雨で堤防が決壊し、本校を含む 660 世帯が床上浸水するなど、木島地区全体が水没した状態となった。その後、樽川及び千曲川の治水事業が進められ、被害は起きていない。

本校は、創立 131 年を迎えた学校である。在籍生徒数は、136 名（学年平均 23 名）である。

２　本校の防災体制について

（1）防災組織（学校防護団の組織）　　○印の職員が主任

係名	任　　務	係　職　員
本部	・全般の統括・指揮、渉外関係、命令伝達、本部旗 （地震・洪水等の時「木島小学校防災本部」）	校長（本部長）・教頭・主事・用務技師・安全係
連絡	・事故の第一次把握、非常事態の通報、関係機関への通報・連絡 ・連絡網の明示、児童の出欠席、児童緊急連絡先名簿 ・各係への本部からの指示の伝達	○教頭、主事
避難誘導	・本部及び連絡係の指令に基づき全児童の安全な避難誘導 ・各教室に「避難経路図」を明示	各担任・専科・学習支援
巡視警備	・全児童の避難終了後校舎内巡視。残留者の点検（特に便所）確認、本部への報告。行方不明者があった場合の捜索。 ・電源スイッチ確認、搬出物の警備、物品の散逸防止。	○６年担任 専科・学習支援
救護	・傷病者の救護、医師･保護者との連絡、救護所の設置。	○養護・特学担任
消火防護	・消火活動。　　・救助袋による救出。 ・防火施設の整備、防火器具の整備保管、校舎施設などの防火防犯。	○４・５年担任
搬出	・校長室、職員室、保健室の重要物品（指導要録、健康診断票、学校日誌、学校事務書類等…「非常持ち出し」と明示する）の搬出、保管、警備	○２・３年担任
児童掌握	・避難したあとの児童の安全管理	１年担任

＊避難後の係活動は本部の指示で行い、活動終了後本部に連絡をする。
＊休日、夜間における緊急事態における防災対策上、本部長より「出動」の指令がった職員は、直ちに出動し任務に着く。
＊火気取り扱い責任者（各室管理責任者）
○防火管理者　教頭が任に当たる。
○火気取り扱い責任者は各室責任者を持って当てる。

(2) 緊急避難場所
①木島小学校避難場所
ア 校庭南、柳の木の横（校舎を背にして並ぶ）
イ 雨天や特別な場合は体育館の場合もある。
ウ 冬期（積雪時）は職員駐車場。状況により木島保育園。
②飯山市地域防災計画による木島地区の指定避難所（飯山市地域防災計画より）
木島小学校 ○木島保育園 ○野坂田連絡所 ○木島神社 ○山岸～安田高地
③木島地区が洪水等で危険地域に指定された時の避難先（飯山市避難地図より）
ア 山岸公民館
イ 木島平村（木島平中学校、木島平村民体育館、木島平村民会館、木島平村若者センター、旧木島平村南部小学校）

(3) 緊急連絡先
① 緊急連絡先

・学校長 → 職員連絡網	・日赤飯山病院 ６２－４１９５
・教頭 → 職員連絡網	・消防署(119) ６２－０１１９
・教務主任 → 職員連絡網	・警察署(110) ６２－３１３１
・市教育委員会 ６２－３１１１	・北信教育事務所 ０２６－２３４－９５５７
・北信教育事務所 主幹指導主事	

・消火器の異状 デンダ ０２６－２３２－４７４１ ・並木防災 ０２６９－８２－２５２５
・電気系統の異状 越後屋電気 ６２－２４２２ ・ガス・水道 宮本園 ６２－３１８６

②地震や洪水の場合の伝達経路
避難勧告・避難指示等→市役所（総務課、企画課）→教育委員会→木島小学校

飯山市地域防災計画参照

(4) 避難訓練の計画
特別な想定のもとに、４月、９月、１月に避難訓練を計画する。
必要に応じて、消防署、地区消防団の指導を受ける。
各学年、学級ごとに随時避難訓練や安全についての学習をする。
全校で実施する避難訓練に併せて、消火栓、消火器具、防火扉の点検や操作訓練を行う。特に４月は防火設備の講習会を実施する。
＜避難訓練の目的＞
①４月（第１回）の避難訓練のねらい…避難経路や係活動等、基本行動の確立
②９月（第２回）の避難訓練のねらい…地震の場合の避難(地震体験)
③１月（第３回）の避難訓練のねらい…冬期における避難(木島保育園へ)の仕方

(5) 災害時の避難場所（区、自主防災組織での設置場所）
水害のおそれがある木島地区では、避難場所が洪水の時と、洪水以外で異なる地区があるので、確認をしておく。

◎児童が学校にいる場合は，学校留め置きを原則。【第１次避難場所】
○地震の場合→木島小学校校庭
○洪水の場合→校舎２～３階

(6) 暖房の管理について
設備の老朽化から、給油のゴムホースがひび割れて灯油漏れを起こすことがある。
ストーブを使用しない期間中は、用務員技師が各校舎・各階のバルブを閉める。
室管理責任者および巡視当番は灯油漏れについて日常的に点検をする。

(7) その他
① 集団下校指導
ア 災害等で、緊急に安全に気を付けながら児童を下校させなければならない場合を想定して、地区ごとにまとまって集団で下校させる指導を実施する。
イ 不審者などへの対応として一人で登下校させることが危険な場合や主として（各地区で地区児童会を行うとき等）に計画する。
ウ 上級生を中心にまとまって下校するので、５・６年生の指導を大切にする。
② 引渡訓練
ア 地震・水害等の緊急時に、児童を安全かつ速やかに家庭に帰すことができるようにする。
イ 保護者が実際に児童を引き取る活動をする中で、帰る際の教師への報告の仕方や、並び方などを確認し、確実に児童を引き取る方法を理解する。

(8) 校長・教頭が不在時の対応責任者
１：教務主任　３：副教務主任　４：生徒指導・安全指導

３　緊急地震速報受信システム設置前後の避難訓練について

(1) 時間　業間休み（10：30）～３校時（11：30）　年３回（４月・９月・１月）
＊１月については、緊急地震速報受信システムを用いた避難訓練とする。

(2) 方法・日程
全校で、休み時間に「もうすぐ強い地震がくる」という想定で各自近くの安全な場所に退避、その後給食室より火災発生のため校庭に避難する。

時　間	職員の動き
９：３０	岳北消防署に「10：39に通報訓練、その後煙の中の移動体験あり」と連絡(教頭) 業間休み ＜想定＞休み時間に緊急地震速報、後、大型の地震が発生。余震が発生する恐れがある。一応揺れはおさまったものの給食室より出火。延焼の恐れがあるため児童と職員は直ちに避難する必要がある。
１０：３０	アナウンス（教頭）４月・９月の避難訓練 「　訓練、地震。訓練、地震。もうすぐ強い地震が来ます。安全な場所に移動して落ち着いて身を守りましょう。繰り返します。」 ・CDを使用し地震効果音を30秒鳴らす（地震中を想定） 「指示があるまでそのまま待ちなさい。」 ・付近の出入り口の戸を開ける。 ↓ （緊急地震速報器使用）１月の避難訓練 報知音→アナウンス「緊急地震速報。およそ40秒後に震度５程度の地震がきます。」（カウントダウン）「震度５の地震がきます。」（揺れが到達）「揺れが収まるまで身を守ってください。」（地震疑似音）　「訓練です」
１０：３５	アナウンス（教頭）　共通 「**非常ベル**　訓練火災。訓練火災。いまの地震により、給食室から火事が出ました。全校の皆さんは慌てずに一番近くの集合場所に集まり、校庭に避難し

	なさい。先生方はそれぞれの分担場所で、児童の誘導避難をしてください。 繰り返します。」
１０：３７	児童避難開始 ・職員は可能ならば避難袋と出席簿を持参し、それぞれの担当場所へ。学年順に２列に並ばせ先導する。 ・階段では下の階優先。「止まれ、進め」の指示
１０：３８	本部設置（学校長・教頭・用務技師・係） 通報訓練１１９（教頭）「通報訓練です。火事です。飯山市野坂田４８４番地３、電話番号は６２－２１４８。木島小学校給食室が燃えています。児童１３６名には避難指示を出しました。」
１０：４２	校庭に本部移動（本部旗、携帯用拡声器） 本部移動作業（学校長、用務技師、安全係）
１０：４５	＜人員確認＞ 避難したら速やかに人員を確認し、教頭に報告する。 ○通常学級担任：「報告します。○年○組、在籍○人、欠席○人、現在員○人、全員避難完了しました。」 ○やなぎ２担任：「報告します。職員○人、全員避難完了しました。」 ○教頭→学校長へ報告 避難完了
１０：５０	＜まとめの会＞ ①　はじめの言葉 ②　消防署の方の話 ③　校長先生の話 ④　係からの連絡
１１：００	終わりの会

＊９月は，避難訓練のあと，地震体験車に乗り，震度５の地震から身を守る体験をする。

４　防災アドバイザーから受けたアドバイス

(1) 信州大学教授 榊原保志先生より　（安全係と教頭が研修）

① 学校はもちろん、家や外出先、登下校中など、いつどこで起きても自分を守ることができるための訓練と捉え、避難訓練や防災学習を行ってほしい。

② 校舎は地震に耐えうる造りになっている。避難訓練の設定によくある「校庭に逃げる」とは、校舎を捨てなければいけないよほどの大きな地震または火災である。

③ 学校職員が個々にどのように動くか、どのように判断するかが大切。（各階の消火の位置を職員が把握しておく。また、消火器や避難用具の使い方も熟知しておく。）

④ 地震は校内の危険箇所を点検し、被害を最小限に抑える。

ア 上から落ちるもの（蛍光灯など）の下には行かない工夫。

イ 揺れて移動するもの（ピアノ・大型テレビ・棚等）には固定させる。

ウ 割れる危険のあるもの（窓ガラス）には飛散防止フィルムを貼る。

→地震速報を聞いたら、カーテンをひく＝ガラスのとびちりを緩和

⑤ 火災は火の気のある所から起きる。

ア 調理室・家庭科室→火をすぐ止める。

イ 理科室→火をすぐ止める。使っている薬品の始末をするというその場に応じた訓練もできると良い。

⑥ 積雪時の避難の場合。

ア 屋外では寒さが予想されるため、第二次避難場所は屋内がよい。さらに全校児童が入ることができる所を設定する。その避難場所に長時間いることも予想されるため、水・食料の備蓄をその場にしてあるとよい。

→第二次避難場所は、小学校より 200m離れた木島保育園とし、屋内に避難できるよう保育園と連絡を取り合った。

⑦ より実践的な避難訓練について

ア 地震では、避難の行動をとれた場面で終わりにする「ショート訓練」をこまめに行ってほしい。

イ 不明児童がいる、けが人がいるなど異常ありの場合も想定して行ってほしい。

ウ 情報把握は通常は教頭であるが、教頭がいない場合は誰が行うか決めておく。消防署員が駆けつけた時に、正確に情報を伝える。

⑧ 残っている児童がいないか確認をする場合は、必ず教室内に入って確認をする。

⑨ 防災学習について

ア 防災に関わる授業をぜひ行ってほしい。

イ 災害が起こった時は、保護者は他校（小学校のほか、保育園・中学校等）の兄弟も迎えに行くことが想定される。その点から引き渡し訓練は、学校間も連携し地域で行えると良い。

(2) 長野気象台次長 上野忠良先生より （全職員で研修）

① 気象や大雨に関する気象情報をインターネットで気象庁の危険度分布やナウキャスト等を利用して、自ら情報収集し、的確な判断をすること。

② プロアクティブの法則（積極的に対応するように！）

ア 疑わしいときは、行動せよ。

イ 最悪事態を想定して行動せよ。

ウ 空振りは許されるが、見逃しは許されない。

５ 緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練

(1) 実施日時 11月１日（水）３校時開始５分前

(2) 成果と課題

① 10月27日に緊急地震速報受信機を設置していただいた。

② 子ども達には抜き打ちで業間休みに実施した。緊急地震速報受信機を使用することで、40秒後に設定したＮＨＫ音を突然に流すことができ、ＮＨＫ音を聞いて、まず自分の身を守る行動を取れたか、職員は子どもたちの避難の様子を観察することができた。（従来は教頭が「訓練、地震」のアナウンスから訓練を行っていた。）

③ 全体的には子どもたちは真剣な態度で避難できていたが、校庭で遊んでいた児童が、緊急地震速報受信機の放送を聞き、わざわざ教室に戻って来たり、ガラス窓の近くで伏せたりしている姿が見られた。（課題）

６ 事業の成果及び今後の課題

(1) 事業の成果

① 防災アドバイザーに、校舎内を見ていただき、職員が危険物として意識していなかった個所（窓ガラス・重量のある掲示物・キャスター付きの楽器など）を指摘された。地震を想定し、落下・移動・飛散防止に全職員で努めていきたい。

② 緊急地震速報受信システムを利用したショートの避難訓練は、リアルな音声が設

定されており、短時間の中で真剣に取り組める。月１回は行っていく。

(2) 今後の課題

① 防災アドバイザーから指摘を受けた危険物の防止においては、市に予算をつけていただけるようお願いしていく。

② 潜る場所のない場所（体育館・廊下・特別教室・トイレ等）では、どのように避難すればよいのか具体的に決めておきたい。

7　まとめ

防災アドバイザーからのご指導により、校内の予想される危険物（もし地震が起きたら、どんなものが落ちてくるのか、滑って移動してくるのか、倒れてくるのか等）について、職員の意識が高まってきた。日常でも廊下を歩行している時や教室内で活動している時に、『これは危険だな』と感じたものをすぐに固定したり取り除いたりする姿が見られるようになってきた。また、緊急地震速報受信機の設置により、短時間で何度も行える訓練ができ、子どもたちに危険を回避する力が身についてきたように思う。

（　文責　教頭　藤澤賢也　）

防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業の取組について
― 養護学校における安全防災教育のあり方について ―

14　長野県木曽養護学校

１　はじめに

本校は、「子どもはできる限りその子の生活する地域で育てたい」「自分らしく、社会で生き抜くことのできる人間形成を」という木曽地域の多くの人々の長年の願いと運動の結果、平成８年４月 12 日に開校した。開校 22 年目を迎えた平成 29 年度は、小学部６名、中学部 10 名、高等部 18 名、全校児童生徒 34 名が在籍しており、県内の知的の特別支援学校の中では小さな規模の養護学校である。

開校以来「自分の力で たくましく 社会で生き抜くことのできる 丈夫で心豊かな子ども」を目標に、「みんなと 仲よく 遊べる子」「自分のことは 自分でできる子」「明るく 思いやりのある子」「進んで働き やり抜く子」の具現を図っている。

２　防災体制について

平成 29 年６月 25 日（日）の朝７時２分に、木曽地域周辺に震度５強の大きな地震が発生した。本校では大きな被害もなく、地震後も通常日課で生活することができていたが、余震や二次災害の恐れもあり、しばらく予断を許さない状況が続いた。児童生徒の中には、地震を体験した恐怖心からか、しばらく動揺して落ち着かない様子の子も見られ、改めて安全防災教育の重要性を痛感した。

本校では、年間３回の避難訓練を計画し、校内で火災や地震が発生したという想定で、児童生徒が避難経路に従い、安全に避難できるような訓練を続けてきた。しかし、今回の地震を受け、休日中の災害の他、登下校中、スクールバス内、寄宿舎での生活中など、いかなる状況においても自分の身を守ることができるようにしていくことが必要だと感じた。「危機管理マニュアル」通りに行動できることはもちろん大切であるが、学校内外でどのような状況で災害が起きても、緊急時に自分の身の安全を守れるようにするための防災体制の構築が重要であると考えている。

そのためにも、多様な想定に対応できる危機管理マニュアルを整備し、様々なショート訓練を通して具体的な避難行動の在り方を明確にしていく必要性を感じている。

３　学校防災アドバイザーの関わり

(1)　８月９日（水）に宇都宮共和大学こども生活学部の白神晃子先生に加え、信州大学の廣内大助先生・本間喜子先生にも来校していただき、第１回目の活用事業を実施した。その中で、校内の安全巡視をしながら、危機管理についての助言をいただいた。また、６月 25 日の木曽地域の地震を踏まえた児童生徒の特性に関する情報共有を行い、木曽養護学校の危機管理マニュアルの確認（点検）や、９月の防災訓練・寄宿舎の避難訓練の計画についての協議も行った。

(2)　９月４日（月）の防災訓練に合わせて、第２回目の活用事業を実施した。白神先生に来校していただき、児童生徒への事前指導や防災訓練における避難の様子について視察及び指導をしていただいた。

４　事業の成果及び今後の課題

(1)　第１回活用事業で明らかになってきたことを受けての今後の方向

① 校内の安全巡視で示唆されたこと

ア 各教室の安全確保のため整理整頓を徹底する。特に、自立活動室、陶芸室、木工室、クラフト室、生活訓練室など、荷物が多い部屋の整頓と安全スペースの確保を行う。

イ 物をできるだけ一か所に寄せて動かないようにし、室内に安全ゾーンを設ける。

ウ テレビ、ホワイトボードなど、移動して頻繁に使用する物は、キャスターを固定し、教室の隅にフックや紐等で固定する。また、食器棚等のガラス戸は必ず閉めておく。

エ 棚・ロッカー等の上の落下物防止対策を行う。また、ドアが開かず、閉じ込められる恐れがあるので、出入り口には物を置かないようにする。

オ 避難経路図の視覚支援を工夫し、児童生徒が自分で確認して活用できるようにする。

② ６月 25 日の木曽地域の地震に関する情報共有で示唆されたこと

ア 震源地の近くにいた高等部の生徒が、地震後にやや不安定になる姿が見られた。学校以外で災害に遭遇したときのケアの仕方を、今後検討していきたい。

イ パニックに陥り、想定外の行動をする子が出てくることも考えておく。事後のカウンセリングが必要な場合の対応などについても考えておく。

③ 本校の危機管理マニュアルの確認（点検）について

ア 緊急地震速報受信機を設置した後、受信機を活用したマニュアルに改定していく。

イ 今後、様々な想定に応じたショート訓練を通して、実際的な内容に修正していく。ヘルメットの装着のタイミングなど、細部についても検討し、訓練で決め事通りにできたかどうかを、その都度評価していく。

ウ 校内での緊急放送が使えない場合なども想定していく。

④ 緊急地震速報受信機を利用した避難訓練・引渡し訓練の計画について

ア 訓練の前に、各教室における児童生徒の動きをシュミレーションしておき、教室でのＴＴの役割を話し合っておく。まとまって自分で避難できる子、教師の補助・介助が必要な子の動きなど、事前学習をした上で避難訓練に臨むようにする。

イ どの場所で災害が起きるのか分からないので、寄宿舎での訓練のほか、この場所ではこうするという、様々な想定でシミュレーションしておき、児童生徒と一緒に考えた上でショート訓練を重ねていく。

⑤ その他

ア 保護者への連絡（オクレンジャー〔緊急メール〕の活用の仕方）、校長・教頭が不在時の職員の動き（休日の教職員の動き、教員住宅職員との連携等）、寄宿舎での職員連絡体制などについて、今後さらに検討を重ねていく。

イ 緊急地震速報を活用した訓練では、学校だより等で地域へも連絡しておく。

(2) 第２回活用事業で明らかになってきたことを受けての今後の方向

① 事前学習について

ア 事前学習が全クラスで行われていたが、ヘルメットをすでにかぶっているなど、現実と乖離しているところも見られた。

イ ヘルメットなどはいつもと同じ場所に置いておき、実際の場面と同じ内容でショート訓練を繰り返していくことが重要である。

ウ 紙芝居や絵カードを使って事前学習をしているクラスがあった。視覚支援として、どのようなやり方で指導することが教育的効果につながっていくのか、先生方同士で意見交換をし、ノウハウを共有していくことが大切である。

エ 防災マップ（ハザードマップ）を用意して、「みんなが住んでいるところはどうなっているかな？」と確認しながら指導しているクラスがあって良かった。

オ 非常ベルやサイレンの音が怖いという子もいると思うが、「みんなを守るために鳴るんだ」ということを事前に伝え、怖いのはサイレンではなく地震なんだということが理解できるようにしておくことが重要である。

② 避難中の様子について

ア アナウンス後、中学部の車いすの２名の子は、１分間で外に出た。窓際で並ぶようにと言っていたが、そこに立って出るのが本当に現実的か？　どのような動き方が最も安全か考え、ショート訓練でシュミレーションしていく。

イ 車いすは高さがあるので、揺れると車いすごと倒れる恐れがある。フードで頭を守っていたが、先生方も自分たちでどう守るかアイディアを出し合ってほしい。

ウ 車いすの生徒が避難する際、一人の担当の先生が最後から一緒に避難していたが、途中で何かあったらどうするか心配になった。他の先生方が手伝えないか。

エ 高等部の避難経路が経路図と違っていた。プールの方を通っていたが、どこに避難していくのか基本をはっきりさせておくようにする。

オ 口を押さえて避難している子もおり、しっかりと位置づいている。

③ 二次行動について

ア 消火係は、いつ初期消火を行うのか。巡回も含めてなのか。初期消火を行うのが遅い気がする。マニュアルの話にもなるが、地震のときの消火係の動きが気になった。

イ 計画の紙を見ながら報告している姿があったが、セリフを確認することよりも、何を伝えたらよいのかを頭に入れておくことが大事である。

ウ 本当の災害時は、パニックになって動けなくなったり、怪我人が見つからなかったり、余震が頻繁に来たりと、いつまでたっても二次行動が完了しないことがあるかもしれない。避難した児童生徒が、二次行動中に何をして待っていたらよいのか考えておきたい。紙芝居などのイベント的な物などを用意しておくことも必要かもしれない。まずは、安心して待っている状況を作る。教師の話でも紙芝居でも、物でも。「今揺れているけれど、大丈夫だよ。余震と言って、また揺れるかもしれないけれど、大丈夫だからね。」などと声をかけて、子どもたちが落ち着く状況を作り出す。外の倉庫に安心グッズを用意しておくとよい（タオルやパニックになった生徒を落ち着かせるようなものなど）。

④ その他

ア ヘルメットをかぶるタイミングを確認しておきたい。ベルが鳴ってすぐに被るのか、揺れが収まってから被るのか。ヘルメットが一か所に固めて置いてあるが、すぐに手に取れる状態であるか。まずは自分の命を自分で守ることが大事なので、すぐに机の下に隠れることを徹底する。

イ 教室以外の場所にいるときもあるが、どんな場所でも備えができているか。

ウ ガラスが割れたときのために、飛散防止フィルムを張るなどの対策ができないか。

エ いろいろな想定でショート訓練を繰り返すことで、自分で考えて行動できるようにしていく。訓練の様子をビデオ撮影し、児童生徒と一緒に見返すことも有効である。

オ 避難後の人数報告は、クラス単位でもよいのではないか。

カ 校舎の設備として、防火扉が地震で作動した場合、風景が一変する。小窓を通って避難するとき、車いすが通れない場合もある。実際に作動させて、いつもと違う風景を見せておく必要もある。可能であれば設備点検と避難訓練を一緒に行い、実際に防火扉を閉めたり、放水訓練をしたり、119 番の通報をしたりすることができるとよいのではないか。

キ 避難開始から最終報告まで４分 30 秒かかっていた。34 名という人数からすると、少し時間がかかりすぎている気がした。

ク 二次行動以降の消火については、火が出ていなくても確認のために見に行く必要はある。もし火が出ていたら、早めに消火をしてもらわないと手遅れになる。ただし、天井まで火が昇っているようなときには、あきらめる。屋内消火栓は、職員の誰でもが使えるようにしておくことが大事である。

ケ 避難完了後にパニックになることもある。最初は避難していても、校舎に戻ってしまうこともあるかもしれない。人数を常に把握しておくことが重要である。

コ ロッカーなど、物が倒れないように固定してあり、素晴らしい。

サ トランシーバーなどがあればよいが、後ろまで声が届かないようなときには、中継して伝えることも必要である。

(3) 寄宿舎の防災教室、避難訓練について

① 煙体験・消火訓練について［９月 25 日（月）］

ア 寄宿舎で火災が発生したときの想定で、児童生徒の煙体験を実施した。煙体験用のテントではなく、実際に生活している寄宿舎の建物内で行ったことで臨場感があり、煙の怖さを知る機会となった。

イ 児童生徒による消火訓練を実施した。実際に消火器を使って消火体験をすることで、いざという時の初期消火の大切さについて知識を深めることができた。

② 入浴中の避難訓練について［９月 28 日（木）］

ア 寄宿舎の夕食終了後、入浴中に給食室より出火という想定で、あらかじめ児童生徒には伝えずに避難訓練を実施した。非常ベル、非常放送に対応し、職員室に残っていた教師にも応援を要請し、すぐに避難着 を着用させた上で寄宿舎から体育館に避難誘導をした。

イ 浴室内では非常放送が聞き取りにくかったという反省が出された。今後、入浴中の児童生徒に対する緊急連絡のあり方について検討していきたい。

(4) 休み時間中の火災を想定したショート訓練について［11 月１日(水)］

給食後の休み時間中に、木工室から出火したという想定で、避難場所に移動するまでのショート訓練を実施した。事前学習をしていたことで、全校児童生徒がスムーズに避難することができた。そこで、次回は担任や児童生徒にも知らせずに抜き打ちで訓練を実施し、ショート訓練で身に付けたことが応用できるようになってきているかを検証する訓練を年度内に実施することを確認した。

５ まとめ

「チーム」としてどんなことができるのか考えて、危機管理に取り組みたい。学校ぐるみで安全に対する意識を高め、５分程度のショート訓練を定期的に実施し、地震を想定して身を守る体制をとる、火災を想定して布を口にあてて並ぶなど、スモールステップで取り組めることを積み重ねていく。それにより、養護学校の児童生徒が自分自身で身を守る方法を学べるようにし、普段から少しでも揺れを感じたらすぐに机の下に潜るなど、いざという時にとっさに反応できるようにしていきたい。

（ 文責 教頭 百瀬俊樹 ）